岩手・大槌「数独」ブーム

高齢者けん引 町内で認定試験も

地元関係者「聖地めざす」

東日本大震災で壊滅的な被害を受けた岩手県大槌町で、数字パズル「数独」がブームになっている。人気をけん引するのは高齢者。仮設住宅の集会所などで開かれる教室で知り、面白さに目覚めたという。高齢者の要望を受けて、出版社は難易度を下げた問題集を発売。今月9日には同町で全国初の認定試験も開かれた。「数独の聖地」を狙う勢いだ。

「できた～」「ダメだった～」――。9日、大槌町中央公民館で実施された「数独技能認定試験」。40分間、集中して問題を解いていた約110人が一斉に緊張をほぐした。約7割が65歳以上の町民だ。最高齢は99歳。

大槌町中央公民館では約 110人が数独の認定試験に挑んだ

「試験を受けたのは小学校以来かな」と笑顔を見せたのは芳賀アイさん（85）。震災後、気分が沈むことが度々あったが、数独を知り「ワクワクする気持ちを思い出した。生まれ変わったよう だ」と話す。

数独は3×3のブロックに区切られた縦横9列のマス目に、1～9の数字を重複せずに入れるパズル。試験を主催した一般社団法人日本数独協会によると、「SUDOKU」として140カ国で親しまれているという。

数独を教えているのは2013年から認知症予防の教室を開く東京のNPO法人、ソーシャルハーツ代表の川上誠さん（63）だ。被災地支援で大槌町に出向き、住民向けにクイズや間違い探しなどを試し、数独にたどり着いた。最初は数字に拒否反応を示した人も、次第にのめりんでいったという。

友人に誘われて始めた臼沢幸子さん（88）は数独の魅力を「できるとスッキリして達成感を得られる。脳が働いている気がする」と説明する。

ただ、初心者向けに用意されている問題集でも高齢者には難しかった。そこで川上さんは昨年6月、数独協会理事の後藤好文さん（66）に連絡を取り、「もっと易しい問題集を出してほしい」と要望した。

数独の商標を持つ出版社、ニコリ（東京都中央区）の副社長だった後藤さん。町を訪れたところ、熱心に解いている高齢者の姿に驚き、すぐに難易度を下げた問題集を企画した。社内からは反対意見もあったが「高齢者が楽しみながらできる問題を提供しよう」と説得した。

今年4月に出版した「じぃじとばぁば ようこそ数独！」は「サクサクと気持ちよく解ける」と評判になり、初版500部が2カ月で売り切れに。増刷し、現在900部を超えている。11月には第2弾を出版する予定だ。

さらに大槌町民から「自分の力を試したい」との声が相次ぎ、数独協会が初の試験を同町で実施することを決めた。今回は4問を出題、正解数に応じて11～7級を認定する。自宅受験もあり、参加者は北海道から九州まで合計で約250人に。後藤さんは「試験を望んでいた人が予想以上に多かった。今後も定期的に開いていきたい」と話す。

試験を見守った川上さんは「高齢者の真剣な姿と試験後の晴れやかな笑顔にうれしくなった。一緒にやってきてよかった」と手応えを感じた様子。町での活動が知られ、横浜市などから教室開催を求められているという。「他の地域でも数独を紹介していきたい」と意気込む。

試験会場では地元関係者から「大槌町をぜひ『数独の聖地』に」との発言も飛び出した。被災地支援から始まった活動が全国に広まろうとしている。

（盛岡支局長 冨田龍一）